
扇風機

東 條 吉 純

今年も扇風機を押入れから引っぱり出す季節がやってきた。我が家の扇風機はかなりの年代物で、首振り機能を使うと、カタカタとかなりくたびれた機械音を立てながら動く。もうずいぶん前から、そろそろ買い替え時期だねと毎年家族の話題にのぼりつつ、鈴虫の鳴く季節になるとまた押入れにしまわれる。

幼い頃、扇風機に向かってアーって叫んで、自分の声が震えたように変わるのが面白かった。昭和時代の子どもはほぼ全員一度は経験したことがあるはずだ。ネット上では「宇宙人の声」と呼ばれたりしている。ところが、この遊び、親には評判が悪く、見つかる everytime 「体に悪いからやめなさい」と叱られた。当時は、なぜ体に悪いのかよく分からなかったが、こんなつまらないことで叱られるのも癪なので、親の目を盗んでしばらくコソコソ続けていたように思う。

さて、この子ども時代の密やかな楽しみは、ある日突然終わりを告げた。というのは、ある日ふと扇風機の羽根に目をやって、埃がびっしりとこびりついているのを見つけてしまったからだ。それは昨日今日付着した埃とは思えない量で、最初は自分の目が信じられなかったが、ひょっとしてこれまでずっと、埃まみれの扇風機に向かって、無防備に大口

を開けてアーってやっていたのかと思うと無性に悲しい気持ちになった。また、このまま、アーってやり続けると、羽根に付着している埃がすべて口の中に飛び込んできて肺が埃でいっぱいになってしまうのではないか。幼い私は急に恐ろしくなって、とっさに、扇風機を分解して風呂場に羽根を持ち込み、石鹸でゴシゴシ汚れを洗い流したことをよく覚えている。さすがに自分の肺を取り出してジャブジャブ洗うわけにもいかなかったので、その代償行為だったのかも知れない。もっとも、1970年代と言えば、夏の暑い日には、ほぼ毎日のように光化学スモッグ注意報が発令され、自治体の車が町内をアナウンスして回っていた時代のことだ。もちろん、家庭用の空気清浄機もなければ、感染予防のためにマスクを着用する習慣もなく、アスベストは「奇跡の鉱物」ともてはやされていた。そんな時代にあって、扇風機にこびりついた埃くらいでとやかく言うな、ということなのかも知れないが、扇風機の羽根を日々清潔に保つ、というささやかな衛生意識にさえ欠けていた我が家は、やや課題のある家庭だったようにも思える。それ以来、私は扇風機に向かってアーってやるのをやめてしまった。憑き物が落ちたようにすっかり興ざめしてしまったのだ。

それでは、今の子どもも同じことをやるのかしらと思ってグーグル検索してみたら、なんと乃木坂46の楽曲の歌詞になっていた。

『扇風機』（作詞：秋元康）

心がざわざわしてる 最近ちょっとね
 好きな人ができたから なぜだか扇風機に向かって
 あああって言いたくなる ああああ...

（以下、省略）

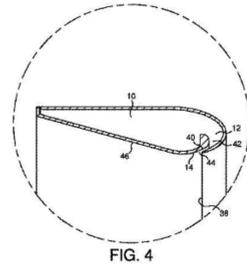
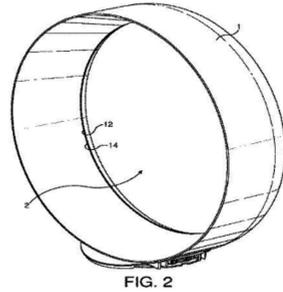
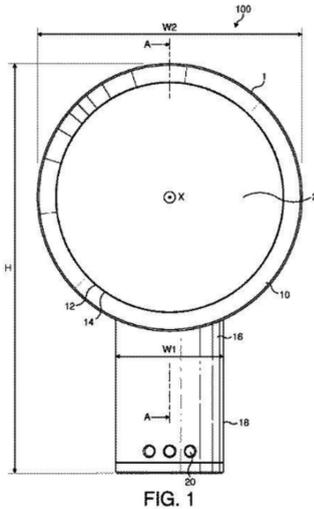
秋元康氏は私よりかなり年上なので、彼自身は、ほぼ確実に、扇風機に向かってアーってやった口であるはずだが、さすがに今の若者にまったく共感してもらえない歌詞は書かないだろうから、扇風機に向かってアー、は時代を超えて子どもや若者が一度は試してみたいくなる行為なのだろう。私も、幼い頃の小さなトラウマがなければ、青春時代のざわついた気持ちをもてあまして、高校生になってもアーって叫んでいたかも知れない。

先日、ヴェルツブルク（ドイツ）に出張した時、ホテルの部屋にチェックインしてみると、ダイソン社製の「エアマルチプライアー」（＝羽根のない扇風機）が置いてあった。この扇風機（羽根もないのに扇風機と呼んでいいのかわからないが、便宜上そう呼ぶ）、土台部分に内蔵された羽根で空気を吸い込み、上部の楕円形のリングの内側にある幅1.8mmのスリットから高速で噴出する。流体の速度が上がるとその流体の圧力は下がるというベルヌーイの定理が教える通り、高速で噴出される空気は周囲の空気を引き込み、いわゆる「空気増幅」が起こるため、吸い込む空気の量よりはるかに大量の空気の流れが作られるというわけだ。この1.8mmという幅が非常に重要で、スリットがそれより狭いと空気圧が内部で高まりすぎてスムーズに空気が噴出されず、それより広いと空気圧が弱まり空気の噴出速度が落ちてしまうのだそうだ。

ヴェルツブルクは一年間を通じて気温が30度を超えることはほとんどないので、滞在したホテルにもエアコンらしきものはなかったが、代わりに扇風機としてはかなり割高なエアマルチプライアーの設置という設備投資をしたホテルを誉めてあげたい気持ちになった。というのは、生まれてはじめてこのダイソン社製品を長時間使用して、そのしっかりした風力と静音性にたいへん満足したからである。

この扇風機、その斬新なデザインと羽根もないのに風が出るフシギ

【特許5456787】の図面より



さ、そして仕組みの説明を受けてもおおきな面白味があるという、まさに革新的な発明品と言えるが、ダイソン社は、この発明の権利保全という意味でも実にしたたかだった。流体力学の教科書に出てくるベルヌーイ定理を扇風機に応用した同社の特許は、出願時の特許請求範囲の設定において極めて周到に記述されたものであり、他社が同社特許権を侵害することなく回避しながら模倣品・類似品を製造・販売することが極めて困難となるように、権利範囲が広く認められた強力な特許である。日本国の特許権が出願されたのは2009年10月19日のことである（特許番号5456787）。特許法第67条1項によれば、「特許権の存続期間は、特許出願の日から20年をもって終了する」とされる。あと5～6年も経つと、他社もこのタイプの扇風機を自由に製造・販売することができる

よくなるだろう。

もっとも、Amazon で検索すると、明らかに模倣品と思しき商品が多数ヒットする。差止請求権を含む物権的権利があることと、その権利が実際にエンフォースされることとは別問題であることがよく分かる。実際のところ、2012年11月、ダイソンは中国市場進出を発表し、複数の中国企業に対して40件以上の特許権侵害訴訟を開始したと中国各紙が伝えたが、エアマルチプライアーは2009年の発売当初から中国で最も多くの模倣品が作られているダイソン社製品で、特許権侵害訴訟の大多数は、エアマルチプライアーの技術に関するものだった。またダイソン社は日本国で特許権とともに意匠権も登録しており、模倣品の日本向け輸出に対しては関税法第69条の13に基づき輸入差止め手続がとられている。

ダイソンの公式HPには今も次のような注意書きが掲載されている。「近年、ダイソン製品を装った模倣品が市場に流通していることを確認しております。また、ダイソン公式ウェブサイトを装い、模倣品を販売するウェブサイトも見受けられます。…弊社は模倣品の製造業者ならびに販売業者に対して断固とした措置を取る所存です。しかし、模倣品の取扱業者を特定し対処するには長い時間がかかります。お客様におかれましては、誤って模倣品を購入されることのないよう、十分にご注意ください」。まさにイタチごっこである。

さて、ホテルの部屋に設置された扇風機は正真正銘のダイソン社製で（あるように見えた）、それほど新しいものではなかったが、首振り機能を使ってもカタカタ音が鳴るわけでもなく、羽根が埃まみれになる心配もない（内部の羽根は知らんけど）。ふと思い立って、久しぶりにアーって叫んでみた。

「宇宙人の声」は生まれなかった。